

令和5年度 第1回 横浜市美術資料収集審査委員会 会議録

- 1 日 時 令和5年11月16日（木）午後1時30分～午後3時30分
- 2 場 所 山九平和島ロジスティクスセンター
- 3 出席者 加藤弘子 委員長、勝山滋 委員、関次和子 委員、長門佐季 委員、南雄介 委員
- 4 欠席者 光田由里 委員
- 5 傍聴者 なし
- 6 議事内容

議題	令和5年度収集候補作品の審査
決定事項 議事	<p>1 定足数の確認 委員数6名のうち5名の出席により定数を充足しており、会議の成立を確認した。</p> <p>2 本委員会の公開・非公開について 〈審議結果〉 横浜市の保有する情報の公開に関する条例第31条に基づき、作品説明と質疑については公開とし、審査報告書作成については非公開とした。</p> <p>3 収集候補作品の審査 収集候補作品2,008点（寄贈1,971点、寄託37点）について、横浜美術館指定管理者が概要を説明した後、検分審査を行った。 審議の結果、全会一致で上記2,008点について、収集が妥当との結論が出た。 議事については以下のとおり。</p> <p>4 議題：令和5年度収集候補作品の審査 ※作品の収集形態及び作品番号については、【収集形態一番号】の形で示す。</p> <p>【寄贈022～023】中ザワヒデキ『二九字二九行の文字座標型絵画 第一番』ほか (南委員) ・『二九字二九行の文字座標型絵画 第一番』の背面のライトボックスはLEDライトのようだが、作品自体は1997年の制作であり、このライトはオリジナルのものではないか。 (横浜美術館) ・オリジナルのライトから交換してLEDライトになっている。作品の亚克力ボックスに割れがあり、オファー者が作家に修復を依頼した際、ライトをLEDに変えたと聞いている。 (南委員) ・承知した。修復履歴を残していただきたい。</p> <p>【寄贈030～404】巖嘔『Rainbow』ほか (横浜美術館) ・オファー者のコレクションには本来、海外の作家の作品も多数あったが、それらは今回のオファーには含まれず、横浜美術館へは、主に日本の作家についてのまとまったオファーとなった。オファー者のコレクションの総体ではなく、また、寄贈者クレジットの</p>

非表示という条件での寄贈になったが、版画史の中で広く活用していけるものと考えている。

(加藤委員)

- ・横浜美術館としては、作品を用いた展覧会の開催などの留保条件がないので、かえってありがたいのでは。

(南委員)

- ・ゼログラフィーの作品は将来的にどうなのか。何十年もするとトナーが落ちてしまうのでは。

(横浜美術館)

- ・耐久性にはいまだ不透明な部分はあるが、トナーを定着させる企業研究もなされている。作家が存命の方には連絡を取って、対応について調整したい。

(南委員)

- ・今後、横浜美術館が先頭に立って、教えていけるようになればと思う。

(南委員)

- ・版画の作品は、現状では額装されていない状態か。

(横浜美術館)

- ・ほとんどの作品が未表装の状態、中性紙のタトウで個別に収納され、大きな収納場所も取らない状態となっている。今後は汎用の額に対応できるようマット装し、その状態で中性紙ボックスに保管していきたい。

【寄贈405～418】 柄澤齊『版画集『死と変容 第I集 夜』、「21 夢または旅路」』ほか

(加藤委員)

- ・コンディションにやや難のある、しみのある作品がいくつか見受けられた。

(横浜美術館)

- ・経年変化が出ているものもあるが、展示には支障がないと判断した。このオファー者からのすべての作品には、作家・画廊の意向を踏まえた額装がなされている。

(加藤委員)

- ・額装を開けたりはしているのか。

(横浜美術館)

- ・していない。

(加藤委員)

- ・処置の必要性についてはこれから確認するのか。

(横浜美術館)

- ・額はそのまま使いたいが、収蔵後、一度額を外して本紙やマットの状態を確認し、処置が必要であれば行う。

【寄託030】 松田修『奴隷の椅子』

(南委員)

- ・作品の椅子は、もともと作家の母親のスナックにあったものか。

(横浜美術館)

- ・そのとおり。

【寄託035】 マリア・ファーラ『ルームサービス』

(南委員)

- ・本作は、オファー者によるコミッションワークとのことだが、どういう意味か。

(横浜美術館)

- ・オファー者が作家の作品を気に入り、作家に新たな試みを促した。作家もその提案を了承し、注文制作という形でオファー者が3点組の制作を依頼したところ、この作品が生まれた。

【その他】

(勝山委員)

- ・オファー者から一括での寄贈を希望された場合、どのように対応しているのか。全て受け入れているのか。

(横浜美術館)

- ・100点単位のオファーはそのまま受け入れるわけにはいかない。活用性のない作品についてお断りの意思を伝えるなど、吟味して受け入れている。美術資料収集方針に照らし合わせての検討や作品の状態、保管方法も鑑みて意見させていただいている。

(勝山委員)

- ・輪ゴムがついていた作品やトナーが定着していた作品など、保管に留意すべき作品があった。

(加藤委員)

- ・現代の作品は、耐久性との関わりで対応が難しいものもある。

(横浜美術館)

- ・今回、オファーがあった作品の中で、一部の版画と輪ゴムが用いられた作品の保管には課題があると捉えている。研修等で随時、保存修復の知識やネットワークを確保するとともに、作家の方々にも伺って最善の方法を考えていきたい。
- ・映像作品については、寄託案件のメディアはそのままお預かりするが、寄贈案件や当館所蔵作品は、年数の経過により、そのメディアが使えなくなると活用が難しいものは作家と調整している。

(関次委員)

- ・寄託案件を受け入れるときは、寄贈への切替えありきで最初からお願いすることが多いのか。それとも、あくまで寄託なのか。また、寄託の期間はどのように定めているのか。

(横浜美術館)

- ・寄託という形でオファーが来た場合は、そのとおりに進めている。その過程で将来的な寄贈の可能性はあるか尋ねることはあり、得られた情報は館内で共有している。寄託の場合、期間は2年間で、解除の希望がなければ自動的に更新する。
- ・大規模改修の機会に、寄託案件について寄贈への切替えはどうかと案内し、いくつか切替わった作品があった。寄託案件についても当館できちんと保管し、活用実績を作っていくことでオファー者からの信頼を積み重ねたい。

(南委員)

- ・作品の寄贈と寄託、全体で結構な収集になった。その一方で、作品の購入についての状況はどうか。

(横浜市)

- ・これまで横浜市文化基金から購入してきたが、現在は厳しい状況。市の財政状況により、一般財源から文化基金への繰り入れが難しくなっている。

(横浜美術館)

- ・購入が途絶えるとコレクションの形成が難しくなるが、市も財政状況が苦しい中、努力しており、横浜美術館と市でお互いに協力している。寄贈、寄託についても座して待つわけではなく、ビジョンにもとづきアプローチをした結果、今回はかなり豊富な作品の寄贈、寄託のオファーを受けられた。購入と寄贈、寄託を両輪にするという考え方をしばらく続けたい。

(長門委員)

- ・横浜美術館の積極的な活動があり、オファー者に理解いただいているからこそ、寄贈、寄託数が増えているのではないかと。内容的には非常に良い作品が入っている。

(加藤委員)

- ・私の前職では、それなりの購入予算がついていたが、平塚市美術館に着任すると、予算がゼロ円で、大変だと実感している。お互いに情報を交換しながら、一緒に考える機会を持てたらと思う。今回の収集作品はユニークで、柴田隆二など、これまでほとんど知られていなかった作家にも目を向けている姿勢が伺えた。

(関次委員)

- ・良いコレクションがまとまった形でオファーがあり、今回の収集候補作品の選定は今後の作品の保管、活用の在り方も考えてのことだということがよく分かった。

(勝山委員)

- ・寄託は一筋縄ではいかないところもある。美術館収蔵庫が私的利用につながらないよう、公的利益を前提とした受託検討を心がけていただきたい。今回の寄贈、寄託により分厚いコレクションになるのは羨ましい。日本画も集めると、これまでのコレクションがさらに生きるのではないかと。

議事は以上